２０２１年８月２２日聖霊降臨後第１３主日説教

ヨシュア記 24 書 1-2 節 a、14-25 節
エフェソの信徒への手紙 5 章 21-33 節
ヨハネによる福音書 6 章 60-69 節

緊急事態宣言が９月１２日まで延長されました。本日の午後、臨時の８月教会委員会を開催し検討いたしますが、公祷の礼拝再開の時期は、少し先になるかもしれません。７月までリモートで行っていた日曜学校のぶどうの木は、９月から、同じくリモートですが再開いたします。

さて、本日の福音書は、先週の続き、「ヨハネによる福音書」６章の物語の最後の部分です。来週から「マルコによる福音書」に戻ります。それゆえ本日は、福音書を中心に学びたいと思います。この部分に「新共同訳」も「聖書協会共同訳」も、「永遠の命の言葉」と小見出しをつけていますが、内容的にはイエス様を信じられなくなった人々が離れていくお話です。「**ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。『実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。』**」（ヨハネ 6：60）と始まり、「**イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて**」（ヨハネ 6：61）と続く通りです。

ここで話題となっている「実にひどい話だ」にある「ひどい」という言葉は、「固い、乾いた」を元来意味する形容詞です。そこから物理的にも精神的にも「固い」を意味し、そこからさらに精神的な意味で「つらい、不快な」を意味する言葉です。英語あるいは日本語にもなっている「ハード」という意味の言葉です。「話」と訳されている部分は、同じく日本語でも聞くことのある「ロゴス」という言葉です。「話」と訳しても構いませんが、単数形ですので、単に「言葉」と訳しても構いません。少し変な表現ですが、「ハードなロゴス」という組み合わせにして、少し深読みしますと、「ヨハネによる福音書」は、イエス様を「ロゴス」であると言っていますので、なんとつらい・不快なイエス様だと語っていることにもなります。もうこの人にはついていけない、そんな雰囲気でしょうか。

それでは何がそんなに「ハード」なのか、聞くに堪えない不快な言葉であったのか、それはもちろん先週の箇所で三度繰り返されました、イエス様の「肉」を食べ、「血」を飲むという部分です。「**わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである**」（ヨハネ 6：55）とあり、イエス様の「肉」が「本当の食べもの」、「血」が「本当ののみもの」だと強調もされていました。

聞いた人々は、イエス様が永遠の命に至る言葉について語られたにもかかわらず、文字通りの意味に捉えたのだと思います。ここで問題となるのは、「聞いた人々」が弟子たちであったということです。ユダヤ人たちは、すでに６章５２節で「**ユダヤ人たちは、『どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせる**

ことができるのか』と、互いに激しく議論し始めた」とありますので、イエス様を受け入れていないことが暗示されていました。血に関して厳密に考える「ユダヤ人」が、血を飲むという表現だけで拒絶するのはわかります。しかし、今日のお話では、イエス様を信じて共に歩み始めた弟子たちが、永遠の命についての教えの中にある言葉につまずいたと語っているのです。

「ヨハネによる福音書」の特徴として、過去のイエス様の物語を語っていながら、福音書が書かれた時代の事柄が反映している、ということがあります。そうだとしますと、教会の中で、同じような疑問が生じたのかと推測されますが、はっきりわかりません。

ただし、６章の前の部分からのつながりを考えますと、このような展開は予想できた事柄でした。直前のお話は、５千人の食事のお話でした。「ヨハネによる福音書」は、増えたとは記述していませんが、このお話をパンが無限に増えた奇跡のお話として受け止めていると思います。それはそれで素晴らしい奇跡かもしれませんが、イエス様が「**はっきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ**」（ヨハネ６：26）と語っていた通り、イエス様が何をしるしとして伝えようとしていたのかを悟らなければ、イエス様がこの世界に来られたことを理解できません。言い換えれば、イエス様の言葉を、人間の理性の範囲内で理解しようとしたのであれば、永遠の命の言葉は理解できないのは当然なのです。イエス様は、この世界の食糧問題を解決するために来られたのではないからです。食料問題を解決することも大切な事柄ですが、そのためにイエス様は十字架にかかられたわけではありません。この世界の命を超えて、本当の命に至る道を示すためです。

イエス様はそのような弟子たちに対して言葉を続けます。「**あなたがたはこのことにつまずくのか。それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる**」（ヨハネ６：61-64）。

「あなたがたはこのことにつまずくのか」この部分にある「つまずき」とは「わな（あるいはそれに用いる道具）」を意味する言葉と同じ語根の言葉です。この言葉にひっかかって、それ以上先に進めないのかと語っておられるのです。弟子たちがひっかかったのは、先に述べた通り、人間的に考えて理解したから、つまりイエス様が語る通り、「肉」的に考えたからです。霊的に考えなければ、理解できないのです。

霊的に考えるとはどういうことでしょうか。それは、信じることです。ただし、人間的に理解して納得して、これならと思い信じるのではなく、まず信じて、そして考えることです。なんとなく、騙されているように思えますが、これが『聖書』が示す主なる神様に対する信仰です。だからこそ、イエス様が、その信仰をもっともわかりやすく示して下さったといえるのです。触れることも見ることも、想像することも困難な主なる神様を、この世界にわたしたちと

同じように生まれ（誕生の仕方は少し異なりますが）、地上で生活され、苦しむ悲しむ人、困っている人と共におられた自分を信じないと命じておられるからです。

しかし、この部分の最後は、「**『しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。』イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである**」（ヨハネ 6：64）と続きます。ここにある「裏切る」とは「引き渡す」という意味ですが、これは明らかに、イスカエリオテのユダのことを示しています。「ヨハネによる福音書」は、イスカリオテのユダについてかなり否定的に描いています。本日の聖書日課の福音書の続きですが、そこでは「**『あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。』イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた**」（ヨハネ 6：70-71）とあります。

最初に書かれた（と仮定される）「マルコによる福音書」は、イスカリオテのユダを、それほど否定的に描いていません。しかし、連続する福音書の執筆の段階で、イスカリオテのユダは、より否定的に描かれるようになったといえるのです。最後に書かれた「ヨハネによる福音書」において、イスカエリオテのユダは、ついに悪魔です。「ヨハネによる福音書」の最初の読者たちが、イスカリオテのユダを悪魔と考えていたかどうかは定かではありません、また歴史的にユダがどういう人であったかを推測することも困難です。しかし、おそらく彼が、イエス様のことを人間的に理解していたことは確かだと思います。それゆえに、ほかの弟子たちと異なり、見方を変えれば、もっとも積極的あるいは主体的にイエス様に関わったのです。そのかかわり方とは、イスカリオテのユダがしたことは、イエス様を引き渡したことですが、おそらくそれが正しいことだと思ってからにほかなりません。イスカリオテのユダの真意は分かりませんが、イエス様を敵対者に引き渡すことが、神様の意図である、正しいことである、そう思ったのだと思います。

すべての人たち、弟子たちも、そして他ならぬイスカリオテのユダ自身、自分のしたことの本当の意味がわかりませんでした。しかし、よく言われる通り、ユダがいなければ、イエス様は十字架に掛らなかったのです。ユダのしたことは、人間的な視点とそれが生み出す行為には、正しさと間違いの両面があることを告げていると思います（ここでは悪魔だともいわれていますが）。しかし、そのような行いであっても、主なる神様は人間の思いを超えて、歴史の流れの中で、救いの出来事を引き起こされたのでした。

イエス様のお話に戻りますと、お話は、「**このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。**」（ヨハネ 6：66）と続きます。先に述べたように、実際の教会の状況を反映しているのかどうかはわかりませんが、パンとぶどう酒の儀礼も含めて、イエス様の出来事を、人間的な判断で理解していた人は、本当に理解したことにはならず、信仰を継続できなかったために離れていく場合もあると告げていると思います。

それゆえにイエス様は十二人に、「**あなたがたも離れて行きたいか**」と問います（ヨハネ 6：67)。するとペトロが代表して模範的な答えをするのでした。ここで弟子の他に十二人という表現が出ています。それは「ヨハネによる福音書」が、弟子たちは、十二人という数を超えて理解していることを暗示しています。そして、そうであるがゆえに、十二人という表現が、使徒という言葉と関連させてはいませんが、特別な意味を持たせていることもわかります。いずれにしても、イエス様から離れる弟子たちはいたが、十二人はしっかりと信仰を保持した、そう語っているのです。

「**主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています**」(ヨハネ 6:68-69)。このペトロの答えは、三つの正しいことを語っています。第一にわたしたちは、イエス様の他、誰のところにも行くところはないということです。これは、唯一の主なる神を信じるということと同じです。イエス様と主なる神様は一つであるからです。次にそのイエス様が「永遠の命の言葉」をもっておられるということです。ここの「言葉」という単語は、「ロゴス」ではありません。話される「ことば」という意味の単語です。それゆえに、ペトロの答えを否定的に判断する場合もありますが、イエス様の語られる「ことば」一つ一つにも永遠の命があると語っていると思います。最後は、「信じ」また「知っている」ということです。ただし、目的語が「神の聖者」であり、「キリスト」ではないので、先の「ことば」と合わせて、この発言を否定的にとらえる場合もありますが、わたしはそうではないと思います。「ヨハネによる福音書」は、イエス様をいろいろな方だと表現するのが特徴でもあるからです。むしろ、それらの称号を超えて、信じることが大切だとしているからです。それゆえ、信じると知るという順番は偶然かもしれませんが、そうだとしても大切なことを示しています。わたしたちは人間の理性を用いて、イエス様について研究解明して、信頼できると確信したから信じるのではないからです。まず、わたしたち一人ひとりが、主なる神様に愛されているがゆえに、まず信じるのです。そして、それが今生きているわたしたちにとって、どのような意味であるかを知るようになるのです。ここでのペトロの答えは、この福音書を最初に読んだ教会の人々の信仰を反映していると思います。わたしたちは、このような信仰に立って歩んでいる、また歩むことが大切であると、示しているのです。それは現代のわたしたちも同じです。

わたしたちの住む世界では、新型コロナが猛威を振るっていますが、その他にも、歴史は繰り返すというような出来事も起きています。この世界の各地でいまだ悲しみがたくさんあるのですが、わたしたちにとって、今も、そしてこれからも大切なことは、地上のすべての人を愛されている主なる神様を、イエス様を通して応える信じることです。その信仰から、次の歩みが生まれます。今しばらく、それぞれの場所で心を合わせて祈りながら、信仰を深めていきたいと思います。